

SHOW HEY シネマルーム



Data

監督・脚本：川口浩史
撮影監督：李屏賓(リー・ピンピン)
出演：尾野真千子/原田賢人/大前
喬一/洪流(ホン・リウ)/
張翰(チャン・ハン)/萬芳
(ワン・ファン)/張睿家(ブ
ライアン・チャン)/梅芳(メ
イ・ファン)

👁️👁️ みどころ

夫を失った妻が、8歳と6歳の息子連れて夫の実家に里帰り。そんな風景はどこでもあるが、それが台湾という設定が本作のミソ。山口百恵の『ひと夏の経験』はセンセーショナルな話題を呼んだが、台湾へ赴いた子供たちにとっての「ひと夏の経験」とは？

本作の理解には日本統治時代の台湾の理解が不可欠だから、是非その勉強を。その上で、自然の美しさと素朴な人情を実感しながら、母と息子たちの成長をしっかり見届けたい。

君は「トロッコ」って、知ってる？

これまで篠田正浩監督や行定勲監督らの助監督を務めてきた川口浩史の監督デビュー作が『トロッコ』というタイトルの本作だが、君は「トロッコ」って知ってる？かという私もそのイメージはわかるものの、現物を見たことはない上、正確な意味やその機能は全然知らなかった。そこで、今回ウィキペディアで調べてみると、「トロッコとは軽便鉄道や産業鉄道、軍用鉄道における貨車の一種。もしくは人力によって走らせる手押車」とある。さらに、その説明によると、トロッコは「主に、鉱山・工場・店などで自動車のトラックが利用できない場合や、隧道・ダム等の大規模工事現場で道路を設置するより早く設置が可能な場合、ないしは、土木工事の現場において大量の土砂を搬出するため、トラックを使用して運搬するよりも早く移送できる場合などに、梯子状に組みあがった線路(軌匠)による仮設軌道を設置して、その上を運行するものが多いが、本格的な路盤に線路を敷設する場合もある。走行させる車両は簡易貨車であることが多いが、鉱山などで動力を持ち込めない場合には人力の手押し車が使われることもある」とのことだ。

君は、芥川龍之介の小説『トロッコ』を知ってる？

川口浩史監督が監督デビュー作でなぜそんなに「トロッコ」にこだわったの？それは、彼が教科書で読んだという芥川龍之介の小説『トロッコ』が鮮烈だったため。1970年生まれの川口浩史監督は1949年生まれの私とは21歳も年が離れているためか、私は芥川龍之介の『トロッコ』を教科書で読んだ記憶はない。さらに、「文学青年」だったと自負している私も、芥川龍之介にそんな小説があることを知らなかった。

そこで、またウィキペディアで調べてみると、『トロッコ』のあらすじは「小田原・熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まった。8歳の良平が、その工事現場で使う土砂運搬用のトロッコに非常に興味をもっていた。ある日、トロッコを運搬している土工と一緒に、トロッコを押すことになった。良平は最初は有頂天だが、だんだん帰りが不安になった。途中で土工に、遅くなったから帰るようにいわれて、良平は一人暗い坂道を『命さえ助かれば』と思いながら駆け抜けた。家に着いたとたん、良平は泣き出してしまふ。という良平の体験を、大人になり東京に出てきた良平が回想している。塵芥に疲れた良平の前には、全然何の理由も無いのに、そのときの薄暗い坂の路が一筋断続しているのであった」と説明している。川口浩史監督がこの小説に鮮烈な印象を持ったのは主人公良平の憧れと恐怖に心から共鳴したためらしい。そんな強烈な印象を第1回監督作品のテーマにしたとはいかにもすごい。

なぜ台湾ロケを？なぜ李屏賓が撮影監督に？

これほど「トロッコ」にこだわりを持った川口浩史監督だから、映画の撮影のためには「トロッコ」を撮影できる鉄道を探さなければならなかったが、高度経済成長を終え、戦後64年を経た今の日本ではトロッコが走っている鉄道などはどこにも存在しない。そこで、たどり着いたのは台湾だ。川口浩史監督に対し、「台湾ならトロッコが残っている」と教えてくれたのが、『花様年華』(00年)などの撮影監督として有名な李屏賓(リー・ピンピン)。そんな情報が伝わったのは、行定勲監督の『春の雪』(05年)の撮影で、川口浩史助監督とリー・ピンピン撮影監督と一緒に仕事をしていた時らしい。

川口監督は当初トロッコのシーンだけを台湾で撮影しようと考えたらしいが、脚本を練っているうちに、台湾でのオールロケを決断。そんな経過の中で、脚本を何度も練り直し、リー・ピンピン撮影監督を迎えた台湾でのオールロケが実現したわけだ。そして、本作を観ると、それが見事に大成功。本作で実感するのは台湾の自然の美しさと素朴な人間模様だが、それはきっと日本の撮影では実現できなかったはず。本作を鑑賞するについては、是非そんな事前情報を仕入れておきたい。

台湾に行ったことは？

あなたは中国や台湾の歴史や現状にどれくらい興味がある？台湾では2008年3月22日の総統選挙で、馬英九率いる国民党が謝長廷率いる民主進歩党から政権を8年ぶりに

奪い返した。その後馬政権は、中国との「三通」(中台間の通信、通商、通航)の実現を目指す対中融和政策を進めてきたが、今や中台の軍事的バランスは明らかに中国の方が上。そんな中台の政治・経済・軍事バランスに是非興味を持ってもらいたいが、本作を理解する上で不可欠なのは日台の関係。それも、理解しなければならないのは徳川幕府の時代のそれではなく、日清戦争終結で結ばれた下関条約(1895年)から1945年の日本敗戦までの間、台湾は日本によって統治されていた時代があったという歴史的事実だ。

1920年代後半から始まった日本の中国への侵略はもちろん否定しなければならないが、意外にも台湾は今でも親日的？それは日本が台湾統治時代に行ってきた鉱山開発や農林水産業の近代化、そして義務教育の普及などが積極的に評価されているためだ。私は2005年3月13日～16日まで台湾に旅行したことがあるが、その時そんなことを痛感した。そして、その体験が本作を理解するのに大いに役立っている。「百聞は一見に如かず」と言うが、まさにそれを実感。ところで、あなたは台湾に行ったことは？

なぜおじいちゃんは日本語を？

本作は夫である台湾人の孟真(もうしん)を失った妻の夕美子(尾野真千子)が、8歳の長男・敦(原田賢人)と6歳の次男・凱(大前喬一)を連れて夫の故郷である台湾を訪れるシーンから始まる。夫の故郷は台湾東部の花蓮(かれん)の近くにある小さな村。迎えに来てくれたのは亡孟真の弟・孟堅(張翰/チャン・ハン)だが、家で待っていた白い顎ヒゲのおじいちゃん呉仁榮(洪流/ホン・リウ)がいきなり「親不孝者めが！」と言いながら遺灰の箱を杖で叩くシーンにビックリ。孟堅の妻・華心(萬芳/ワン・ファン)の説明によると、台湾では子供が親に先立つのは大罪だから叩いて叱って家に入れる習わしらしい。こんなシークエンスの中で話されている言葉はもちろん中国(台湾)語だが、時々おじいちゃんがしゃべる日本語は結構達者。えっ、おじいちゃんは日本語をしゃべれるの？それは一体なぜ？

子供たちにとっての夏休みの台湾旅行は？

子供にとって少し離れた距離にある父親のおじいちゃん、おばあちゃん、母親のおじいちゃん、おばあちゃんの家を訪れる旅は楽しいもの。お正月や夏休みそしてお墓参りなど節目節目の日に訪れるそんな年中行事は、大人になった後もよく覚えているものだ。私にとって父親のおじいちゃん、おばあちゃんの家は歩いて10分くらいのところにあったから日常的によく訪れていたが、正月や夏休みには全国に散らばっている私の叔父さんや叔母さん、従兄弟たちがおじいちゃんの家を集まってきていたから、それは大きな楽しみだった。他方母親のおじいちゃん、おばあちゃんの家は電車で30分くらいのところがあったから、小さい頃の私にとってそれは数少ない旅行体験だった。

そう考えると、8歳の敦と6歳の凱がはるか海を越えて台湾まで母親とともに旅行するというのは大冒険の旅のはず。私の誕生日は兄と1年半しか離れておらず学年も1年違いだ。敦と凱は2年離れている。この年頃では1年違いの差は大きく、夕美子も事あるごとに兄の敦を頼りにしているようだ。きっとそれは、父親が亡くなった後はなおさらだ。

う。電車の中でのやりとり、孟堅おじさんの迎いの車を待つ間でのやりとりをみていると、長男敦の態度が何となく反抗的なのところが気になるが、母親はそれに気づいているの？私
の見る限り、夕美子は何かとお兄ちゃんに責任を押しつけているようだが、そんな教育ば
かりしていると？さて、今回の台湾旅行は2人の子供たちにどんな影響を？



©2009 TOROCCO LLP

全国公開中

『トロッコ』公式HP <http://www.torocco-movie.com/>

1枚の写真が繋ぐものは？

デジカメが普及した昨今とはとにかく何でもかんでも撮っておくという習慣になっているが、フィルム時代は1枚の写真の価値が高かった。ちなみに、現在放映されているNHK大河ドラマ『龍馬伝』でも坂本龍馬の「あの写真」がよく登場するが、今や日本人のほとんどがあこの1枚の写真を知っているのではないかと思うほど有名だ。敦にとってそれと同じように大切なのが、父親が亡くなる前に父親から渡された1枚の写真。それはトロッコを押し出す少年の写真だが、この少年こそ戦前の少年時代のおじいちゃんだった。それをおじいちゃんに見せると、おじいちゃんにとっては目の前にいる孫たちが亡くなった長男孟真と瓜二つに見えたのは当然だし、自分の少年時代をこの孫たちに重ね合わせたのも当然だ。

しかして、この写真を撮ったのはどの場所？写真のトロッコはどの線路のもの？ここか

らおじいちゃんと孫たちのトロッコ探しの旅がはじまったが、さてそれは見つかるの？大量撮影、大量消費の習慣がすっかり身につけてしまった昨今だが、こんなストーリーを見ていると1枚の写真が繋ぐもの大切さを痛感。

自然の中でこそ！トラブルを乗り越えてこそ！

今や日本国は親による子殺し、子による親殺しの犯罪が多発する憂うべき国になっているが、前述の夕美子と敦のちょっとした確執＝相互理解不足が拡大していくとヤバいのでは？台湾にある亡き夫の実家に戻って数日後、夕美子は日本から届いた恩給欠格者への通知に怒り嘆くおじいちゃんの姿にはじめて触れることに。すると、それに呼応するかのよう、夫亡き後一人懸命に子供たちを育ててきた夕美子の不安も自然に告白できることに。そんな夕美子に対しておばあちゃん楊鳳林（梅芳／メイ・ファン）は「子供たち、少し、ここで預かるうか」と優しい言葉をかけたが、これを物陰で聞いていたのが長男の敦。もちろんこれは大人が聞けば何の問題もない会話だが、敦はその言葉を「僕たちはここに置いていかれるかもしれない」と理解したから大変。

ここから、本作のクライマックスである2人の子供たちと林業に従事している村の青年・振哲（張睿家／ブライアン・チャン）によるトロッコを押す旅が始まるわけだ。スピードを上げて走るトロッコでの旅は子供たちにとって痛快なものだったが、深い山の中に入りこみ家に帰りなくなった時、さて2人はどんな行動を？過保護がまかり通っている昨今の日本では、子供たちだけのこんな冒険は考えられない。これは、自然がいっぱい残る台湾の小さな村だったからこそできることだ。

やっと2人が家に戻ってきた時、凱を抱きしめながら「お兄ちゃんがいながら！」と怒鳴りつけたことに対して敦が放った「僕、いないほうがいいの？」との言葉に夕美子はいかなる対応を？こんなトラブルを乗り越えてこそ、母と息子の気持が通い合うはずだ。そんな感動的シーンは、あなた自身の目でしっかりと。

夕美子の決断は、ちょっと無茶？

プレスシートによると、本作の脚本は14稿までいったらしいから、推敲に推敲を重ねられたことはまちがいない。そして、本作のラストにつながる重要なシークエンスは、夕美子がある決意をおじいちゃん、おばあちゃんに述べるシーン。その場面は、夕美子が亡き夫の遺灰を祭っている祭壇が置かれている部屋だが、そこで夕美子が切り出したのは、何と「息子たちと共にこの村に残る」ということだ。しかし、ちょっと待てよ。台湾人の男性と日本で結婚し、8歳と6歳の息子をもち、日本で旅行ライターという仕事をしている夕美子の決断としてホントにそれでいいの？

まず、子供の国籍は？それは将来子供が決めればいいことだと言っても、そう簡単な問題ではないはず。それに何よりの現実問題として、子供の教育は？敦はすでに小学校に入っているし、凱はこれから小学生になるわけだが、台湾に残れば台湾での中国語の教育に2人は溶け込んでいけるの？また、東京の教育レベルとこの村の教育レベルは？さらに、中学高校を終えた後、大学に進学させるつもり？そしてそれは日本の大学それとも・・・？

また何より重要な問題として、この村に住んで夕美子はどんな仕事に就き、どれほどの収入を得ることができるの？

そんなこんなを考えると、この家に息子たちと共にとどまるつもりだという夕美子の決断は、ちょっと無茶では？それに対するおじいちゃん、おばあちゃんの答えを、私は固唾をのんで見守ったが・・・。

貴重な「ひと夏の経験」は、きっと心の思い出に

近時の人気となっている邦画の若者映画は、やたらセリフが多くやたら説明調が多いが、本作はそれとは正反対。霍建起（フォ・ジェンチー）監督の『山の郵便配達』（99年）ほどではないが、トーンはとにかく静か。そして、リー・ピンピン撮影監督が映し出す美しい景色の中でのストーリー展開に、川井郁子のバイオリンが巧妙に絡み、全体的にすばらしい雰囲気をつくり出している。2人の子供たちにとっての夏休みの台湾旅行は、嫌な思いや怖い思いをしたことはあっても、全体としては収穫が大きかったはずだ。

私が弁護士登録をしたのは1974年4月だが、その年の6月にリリースされ、大ヒットした曲が山口百恵の『ひと夏の経験』。「あなたに女の子のいちばん大切なものをあげるわ」という歌詞がセンセーショナルな話題を呼んだものだ。この曲が描いた主人公にとって、「誘惑の甘い罠」をテーマとした「ひと夏の経験」は心の思い出になったはずだが、さて敦と凱にとって台湾での貴重な「ひと夏の経験」は、どんな心の思い出に？

映画は、台湾を去った後の母親と2人の兄弟の姿を全く紹介しないから、それはあなた自身の想像の世界でしっかりと。

2010（平成22）年4月9日記

募集を停止！国家的詐欺をどう考える？

日本は、「最低でも県外、国外」とできもしない約束を平気で口にする総理大臣がいる国。すると、「卒業したら約80%が裁判官、検察官、弁護士になれる法科大学院」と大ウソをついたのも当たり前？

法科大学院は司法改革の柱の1つとして04年4月に始まったが、74校も乱立。司法試験合格者が1500人の時代に5800人の大学院生が生まれたのだから、80%の合格は最初から大ウソ。ところが、そんな問題点は十分報道されないまま、合格率は48.3%、4

0.2%、33.0%、27.6%と年々低下し、合格者が0の大学院も3校出現した。そんな中、過去4回で合格者3名と全74校中最少だった姫路獨協大学の法科大学院は、2011年度以降の院生募集を停止した。つまり廃業だ。現在17名いる在院生は修了させる方針だが、そんな状況下まともな勉強ができるはずがない。民法は詐欺に対しては取消しや損害賠償ができると定めているが、こんな国家的詐欺に対して国民はいかなる方策を？

2010（平成22）年6月1日記